

全考察を転換する前に — 『論理哲学論考』以降の展開—

入江俊夫

千葉大学（非常勤講師），文教大学（非常勤講師）

ウィトゲンシュタインの遺稿全集¹の出版が 2000 年に完了して以来，ある程度時間が経過し，初期の『論理哲学論考』（以下，『論考』）からの後年の『哲学探究』（以下，『探究』）に至る彼の思考の展開について啓発的な遺稿研究が現れ，展開の内実もかなり明らかになってきた．次に引用するのは，『論考』で想定されていた，あらゆる命題が共有する一般的形式の提示を諦念することに関し，『探究』で述べられた所見である．

我々が「命題」「言語」などと呼んでいるものが，私の思い描いていた形式上の統一体ではなく，多かれ少なかれ互いに類似している諸形象の家族であることを，我々は認識する．——だが，そのとき論理(学) (Logik) はどうなるのか？その厳密さがそこではらばらになってしまうように見える．——しかし，そのことによって論理(学)が全く消滅してしまうわけではなからう．——というのも，どうやって論理(学)がその厳密さを失うことができるというのだろうか．もちろん，人がその厳密さをいくばくか割り引くことによってではない．——結晶のような純粋さという先入見は，我々が自分たちの全考察を転換することによってのみ，取り除くことができるのである．（考察が転換されなくてはならないのだが，それはわれわれ本来の必要を軸点としてなされなくてはならない，ということができよう．）（第 108 節）²

この所見は 1930 代後半に成立したものであり，ウィトゲンシュタインは，この時期にはすでに，自然誌や民族学的考察を多用するという意味でも後期哲学の思想圏に入っている．しかしながら，Kuusela (2008)³では，広範な遺稿の調査を通じ，上で述べられた「転換」の中核的なアイデアを，ウィトゲンシュタインの哲学の方法論的な側面における変化として，彼が哲学を再開してわずか 2 年後の 1931 年に成立した手稿 (MS 111) に遡ることができることが説得的に示されている．

本発表では，この Kuusela の結果を紹介・補強するとともに，さらに以前の手稿にまで遡ることにより，上述の変化が，哲学の方法論だけに止まらず，『論考』以降に十全に展開される動態的な言語観（概念形成論）とも密接に関係していることを示した

¹ *Wittgenstein's Nachlass: The Bergen Electronic Edition*. Oxford University Press, 2000. (遺稿の参照は，Von Wright による番号付けにより行う)

² P. M. S. Hacker & J. Schulte (eds.). G.E.M. Anscomb, P. M. S. Hacker & J. Schulte (trs.). *Philosophical Investigations*, revised 4th ed. Wiley-Blackwell, 2009. (訳出の際に，藤本隆志訳，ウィトゲンシュタイン全集 8『哲学探究』（大修館書店，1976 年）を参照した)

³ Kuusela, Oskari. *The Struggle against Dogmatism: Wittgenstein and the Concept of Philosophy*. Harvard University Press, 2008.

い. 4

まず、MS111 やその他関連する遺稿を駆使し、上述の「転換」を『論考』に残存していた独特な意味での「独断論」からの脱却として特徴づける Kuusela の解釈を紹介・解説する。彼の解釈は、表記法と結びついた「語り／示し」の区別を考察方法や見方にまで拡張する点に重要性がある。それに伴い、ウィトゲンシュタイン的な意味での「形而上学」の観念も拡張され、「独断論」と関連付けられることになる。

こうした Kuusela による解釈の眼目が十分先鋭なものになるには、『論考』段階ですでに相当程度のこと達成されていたことが認識される必要がある。とりわけ、『論考』がすでに相当「反形而上学的」であったことが認識されねばならない。この認識は、言語と世界との関係に関して、世界が言語に論理構造を与えるのか、その逆であるのかという伝統的な『論考』解釈の論争に対して、後者の側に立つことを含意する。本発表では、この論争を言語と世界の間内的関係という観点から整理した McGinn (2010)⁵を手掛かりに考察したい。その結果、『論考』における使用説が強調され、語の意味についての指示説（真理条件的意味論、像の理論）と使用説（主張可能性条件的意味論、言語ゲーム論）の対立という、いまだに根強い意味理論的通念に異が唱えられることとなるであろう。

さらに、哲学の再開以降のウィトゲンシュタインが命題の一般形式という囚われから脱却していく過程を追跡することを通じて、上述した方法論における変化と動的な言語観との関係を明らかにしたい。その際に、彼の数学の哲学における諸考察が橋渡し役となってくれるはずである。以上の考察を受け、余裕があれば、最初のほうで引用した『探究』第 108 節における“Logik”が「言語の論理」のことではなく、「学科としての論理学」のことを言っているとする Kuusela に対して、前者と後者は切り離すことができず、Kuusela の言い分はむしろ、転換されるべき「全考察」のほうに当てはまることを論じようと思う。

以上を通じて、ウィトゲンシュタインの哲学の方法・言語観・数学の哲学のそれぞれの発展が有機的に関連し合っていることを示したい。

⁴ 本発表は、拙論「概念形成へのまなざし —ウィトゲンシュタインの言語観と数学の哲学—」（荒畑靖宏・古田徹也・山田圭一編著、『これからのウィトゲンシュタイン —刷新と応用の 14 篇』所収、81-101 項、リベルタス出版、2016 年）の注 17 で述べた主題の追究でもある。

⁵ McGinn, Marie. “Wittgenstein and Internal Relations”, *European Journal of Philosophy*, 18 (4), 495-509, 2010.